

グループ学習研究

牧野満（奈良ブロック）

1. はじめに

競争研究の後は、グループ学習研究に入りました。1999年からの4年間の研究は、森、澤口、牧野と3人の研究部長によって進められてきましたが、中でも、澤口研究部長がこの研究の中心的な役割を担い、研究部例会の計画、研究のための学習会、各校へ出向いての授業見学、実践分析など、幅広い活動と共に、研究部から様々な発信をしていました。この期間、澤口氏が全てを仕切りグループ学習研究を牽引してきたのです。ところが、最後の1年だけ私が研究部長を引き受けることになりました。支部の重鎮からも、「本気でグループ学習をしているの？」と揶揄されるくらいグループ学習は私の実践からは遠い所がありました。そんな私がどうして途中交代して部長を引き受けることになったのか未だに分かりません。

2. グループ学習に至る背景

競争研究からグループ学習を研究テーマに掲げた理由について森基氏は次のように述べています。

『2002年、新しい学習指導要領が全面実施される。そこから、これからの学校体育の進む方向が伺える。「心と体を一体としてとらえる」として「体ほぐしの運動」が新しい試みのようであるが、一方で「自己の能力に適した課題の解決をめざして」という文言から、「めあて学習」を継続し、そして拡大していく意図がみえる。「個性尊重」名の下に、みんなに共通する「わかる」「できる」はなく、「個に応じた」それぞれの課題をそれぞれが学習し、みんなで共通の課題を一緒に学ぶことを放棄するものである。』（キッキワ731号）

1998年（平成10年）に告示され、2002年（平成14年）度から実施された学習指導要領の目玉として「体ほぐしの運動」が加わりました。社会力やコミュニケーション力の低下という子どもが抱える課題から、子ども同士がゆるいつながりを作るような授業が登場します。それ以前の「基本の運動」や「体操」領域のリニューアルとも言えるし、文科省から示される資料の例示には、かつての「体力づくり」の運動や「これでどんな力をつけるのか」と疑問符の付くようなものが多く見られました。これは、体育が「息抜き」「気晴らし」の教科として存在することをより強調するものであり、体育の教科内容を薄めるものでした。現在も学習指導要領に「体ほぐしの運動」が存在しますが、20年経った今、それが子どもを巡る課題に込めているのかというのは疑わしいものです。

また、「めあて学習」が浸透し、個性化・個別化の学習が進められ、それが当時流行だった習熟度別指導によってより強化されといった状況がありました。その対抗軸としての「グループ学習」を用意する必要があり、研究部では、「グループ学習」像をより鮮明にしようという意図があったようです。

3. 大阪支部におけるグループ学習

この間、グループ学習の研究対象とした実践は以下ようになります。

<グループ学習研究の対象となった実践>

4年「側転でつながろう」マット（佐々木）

4年「みんなで泳げるようになろう」水泳
（佐々木）

6年「サッカー」（山本ま）

1年「ジャングルジム&鉄棒」（国友）

3年「シュートボール」(大森)
5年「フラッグフットボール」(森田)
中学「フラッグフットボール」(飛田)
3年「ドラマを生んだ鉄棒ブーム」(大原)

これ以外にも、「体育おもしろスクール」で報告された実践は、何れもグループ学習を意識した実践となっています。

研究部が授業計画の初期段階から関わり、教科内容、技術指導の系統性についてのアドバイスをを行い、実践者と一緒に実践を作って行きました。実践後は、実践者が実践をまとめ、その分析批評は研究部が行いました。支部研究部例会では、実践を元に、研究部は、自分たちが掲げたねらい(グループ学習)について、明らかにしようとしたのでした。わかったこと、わからなかったことについてまとめ、それを例会で、参加者に問うというスタイルを確立しました。

また、研究部自身の学習と例会運営を考え、グループ学習の文献学習と実践研究の二本立てで研究を進めました。グループ学習の文献研究で取り上げた文献は「体育の授業方法論」(出原氏)、グループ学習分科会の「基調報告」等(中瀬古・矢部・田中報告)、「戦後体育実践論」(中村氏)、「体育技術と運動文化論」(丹下氏)などです。これらの文献からグループ学習についての理解を深めて行きました。

4. 森田実践から集団の質について考える

グループ学習研究を牽引してきた澤口研究部長はグループ学習の教科内容を追究しようとしていました。『「グループ学習」は単なる授業方法論なのか、それ自体にも教科内容はあるのかと考えたとき、研究部では「グループ学習」には、教科内容が何かあると考えて取り組んできた。』(キック7 31号) 集団としての質がどのように高まっていくのかを明らかにしようと、泉州ブロックの森田先生の実践(5年のフラッグフットボール)を対象に研究が進められました。

子どもの書いた大量の感想文から、集団のことについて書いた記述を拾い上げ、「個人思考」が「集団思考」にどう変化していくのかを考察したのでした。

森田実践は、実践期間が10月～2月と何と50時間にも及ぶ実践で、2:2(ラン・スイッチ)→4:4(ラン・パス)へと学習を進展させ、最後はフラフト大会を行います。実践の中では、毎時間の感想、ビデオ撮りからの分析、キャプテン会議なども行い、学級がフラフト一色だったことがうかがえます。これだけの長期間、子どもたちは飽きることなくフラフトにのめり込んだその集団とは何だったのか?グループ学習をどう組織したから子どもはのってきたのか?森田実践から、その答えを見いだそうとしたのでした。

研究部が実践のねらいとして掲げた点は、次の3点でした。

- ①フラフトの技術指導の系統性。(2:2からの発展は有効か。)
- ②グループ学習の手立て(グループノート、感想文の書かせ方、リーダー会議等)について有効性を確かめる。
- ③球技におけるグループ学習の高まりの変容を探る。

これらのことを森田実践を通して検証していったのでした。

①について

コンビネーションを最小単位である2人にすることで、より局面を絞り込んで学べるのではないかという仮説を研究部は立てました。森田実践では、2:2ラン→スイッチ→4:4ラン→スイッチ→パスという段階で授業を組み立てたのですが、2:2から4:4への移行がスムーズだったようです。また、2:2の段階では、作戦を口頭で伝えるレベルで良く、4:4の組織だったプレイを行う場面で、作戦を書くよう

にした方が良いということが分かったようです。

②について

ペアチーム、グループノート、リーダー会議について総括されていますが、ここではグループノートの記述の変化を取り上げたいと思います。

子どもの感想は、大まかに、単なる感想→攻守についての感想→作戦について（個人）→プレイの分析（グループ）という発展があります。森田実践では、授業が進むにつれて、「個人で考えたことを書く」形式から、「グループで話し合ったことを書く」形式に変えました。これは、個々の考えを、グループとしての考えに発展させるための手立てとして有効であったようです。

③について

よく「集団の高まり」と言われますが、一人一人のグループの成員がこの「個人思考」から「集団思考」へどのような方向性をもつかについては、

①（集団内）個人思考

②形式的集団思考

③実質的集団内個人—個人思考

④実質的集団思考、という段階を経ているということが分かってきました（安武試案）

※「集団思考」の前段として「集団意識」があり、集団を意識し出すと、個々の形式的な集まりの段階から、グループで何かをすることを意識し出す段階へと発展する。

ある学習課題が個人個人バラバラの状態（個人思考）から、ペアで重なり、それが次第に合わさって、徐々に複数の個人思考が共通の方向性を持ちます。そして、「実質的集団思考」に高まると、個人の学習課題がすべてグループ全員の共通課題になり、すべての成員の思考が同一方向を向くと考えたのです。

このように「集団の高まり」を具体化したことが「グループ学習」研究の成果でした。学年当初は、子ども同士の関係性が何もない所からスタートするのですが、それが、教材を媒介として、組織づくりを行い、「集団思考」を高めていく道筋が、グループ学習研究から見えてきました。こういう指標を用いることで、今の集団はどこに位置し、次は何を目指せば良いのかということもわかるようになりました。また、教師側からの大事な働きかけとして、単に授業後の感想を描かせるのではなく、集団思考に向かわせるような問いかけや、グループノートの工夫についても、グループ学習研究から見えてきたことでした。ただ、研究の成果を個々の実践に還元することは、この後、ほとんど見られませんでした。

※グループ学習を研究対象とした実践は、「3年シュートボール（ハンフープボール）」（大森）、「ドラマを生んだ鉄棒ブーム」（大原）「中学校のフラフト実践」（飛田）が、支部研究部例会でも報告されていますが、誌面の制約上、ここでは森田実践のみを取り上げています。

5. 生活指導とグループ学習

グループ学習研究という課題を引き継ぐ事になったのですが、これは私には大変重荷でした。澤口研究部長の後を引き継いで、どの様な研究ができるのか見通しが持てませんでした。グループ学習研究をその時点で終えても良かったのですが、支部内では「このままでは研究は終われないだろう」という声が囁かれ、グループ学習研究をまとめることが求められたのです。それで、1年で終わる事だけを先に明確に決めて、その年のグループ学習の研究が始まったのでした。

私自身の課題意識としては、生活指導とグループ学習との関連や差異をはっきりさせたいという思いがありました。例会には、全生

研の藤木祥史先生（京都の中学校体育教師・京生研）を招き、実際の授業場面や生活指導から、同志会との違いを見出そうとしました。

支部例会では、「近畿が発信する新しい集団づくりと京生研の集団づくり、そして私の生活指導と体育実践」という演題で話をして頂きました。講演では、今の子どもの変化を「発達阻害の進行」とし、①全能感の未成熟（他者を信頼できない子どもは平気で他人を侵害する） ②少年期の喪失 ③未成熟な思春期（親密な同性関係を築けない） ④青年期の危機（他者にいたわりのないままの性衝動）という特徴を挙げています。しかし、こういった子どもの変化に教師の指導が切り込めていないことを指摘されていました。

京生研の中心的課題は、「ツッパリをどう指導するか」ということであり、藤木サッカー実践も「課題を抱えた子どもの側からの集団づくり」と言う視点で体育実践を進めておられます。課題を抱えた子どもの個人指導の成立なしに集団づくりは困難であると言うことを前提に立ち体育の授業を進めるのですが、それだけに留めるのではなく、その子どもの周囲にどれだけ集団に取り込んでいく関係性を教師が意識的に組織するのかに重点が置かれています。

藤木氏から見ると、体育の授業場面においては、同志会の授業が非能率的に映るようでした。グループノートに記録や感想を書かせたりするような指導が今の子どもに課題に対応できるのかどうかという疑問も出されました。体育の先生でもあるので、同志会の授業には理解を示されています。しかし、同志会の体育は、書くことを重視する余り、まわりくどい、活動的でないという感想を述べられていました。

反対に、私から見れば、生徒の活動量を増やし、余り考えさせない体育の授業には違和感を持ちました。興味深い話が聴けて、同志会との違いがわかったのですが、それをどう

グループ学習研究に生かせるのかが分かりませんでした。最後の例会では、発達ごとにグループ学習像をまとめたのですが、不十分なまとめになってしまいました。

6. 最後は広島大会で報告

4年間の研究成果を全国大会で報告することになっていたようで、2003年広島大会のグループ学習分科会で研究報告をしました。「技術をベースに考える同志会実践と生活指導を求める全生研とを同じ土俵で比べること自体おかしい」という意見を始め、たくさんの批判を受けました。

同志会では、「荒れた学級をフラフトで立て直す」というような報告も当時は多く見られました。フラフトは学級づくりの手段でもないし、子どもをつなぐために行う教材ではないことは明らかです。それにも関わらず「荒れた学級を～」という類の実践報告は今も見られますし、それを否定すべきものでもないと思われれます。生活指導と体育実践の位置関係がスッキリせず、一年で終わることが決まっていたので、とりあえず、終わる（終われる）ことになりました。私には大変荷の重いグループ学習研究でした。

ただこの間の実践としては、大原さんの「鉄棒の熱中体験」、佐々木さんの「ドル平の指導：ガバツ VS ニュー」、大森さんの「シュートボール（半フープボール）」など、今振り返れば、後の教材の指標となるような実践も報告されています。そういう意味では、私は完全にダメダメでしたが、グループ学習を意識することで、支部の皆さんの実践が開花した時期だったと言えるかもしれません。また、これらの実践は、キックオフ（31～33号）に掲載されていますので、是非読んでいただきたいものです。